狂肉

エンジン

　二年前の夏、私は仕事仲間と一緒に、三重県と奈良県の境目にある大きな川に行った。大阪からキャンピングカーを走らせて二時間程度の場所なのだが、周りをずっと山に囲まれてて、近くにコンビニもなし。水洗便所どころか普通の便所すら怪しい田舎だった。

　「大自然と肉を満喫しようや！」と先輩の一人が言い出したのがきっかけで、バーベキューをやることになった。ちょっと行楽シーズンをはずれてるってこともあってか、その時いたのは私達のグループだけ。男連中はアホみたいにはしゃいで、揃いも揃って着ているものを水浸しにして笑っていた。

　私はと言うと、ああいうバカ騒ぎは元来好きじゃないので、他の女の子と細々バーベキューの準備をしていた。「アホやねえ、水着も着てへんのに」とか愚痴りながら。とはいえ、カンカン照りの日差しの中、口に運んだタレべっとりの肉をビールで流し込むのは最高で、それだけでも「来てよかった！」と思わせられた。……始まってから十数分もしない内に、肝心の肉が無くなってしまうまでは。

「おい、お前等食べ過ぎやで、食い意地張りすぎやぞ女性陣」

「ウチまだ一切れしか食べてないですよ！　そっちこそ、ガブガブ飲んでバクバク食べちゃって！」

「買った肉が少なかったんちゃうんか？　買ったん誰？」

「野村君でしょ？」

「おい野村、他に肉ないか……あいつ何処行ったんや？」

　食材担当の野村君が、いつの間にかいなくなっていた。彼は私の後輩なのだが、おっちょこちょいなところがあり、仕事でも思わぬミスをやらかしてしまうこと が度々あった。この時も、うっかり肉を少な目に買ってしまったのだろう。そう思って皆で野村君を捜したが見当たらない。

「もしかして、川に流されたんちゃうか！？」

　先輩の言葉をきっかけに、しかるべき所へ連絡を入れるべきかどうか考えはじめたころ、彼はひょっこり戻ってきた。

「いや、ごめんなさい。ちょっとトイレ探してまして……」

「アホ！　誰かにちゃんと言うとけ！」

「ほんまごめんなさい。それに、ちゃんと肉もこの通り……」

　彼は右手に持っているビニール袋を皆に見せびらかした。中にはレバーのような赤っぽい生肉が入っている。

「いや、自分でも肉全然足りてないかなって心配やったんで、ちょっと店見つけて買ってきました」

「おお！　野村にしてはええ判断やんけ！」

「へへ……」

　かくして、バーベキューは再開された。野村君が用意したその肉は、普通の牛レバーよりも側面がやや白っぽく分厚い感じがした。それが網の上に載せられると、焼ける音とともに匂いのついた煙が上がり、皆の食欲を逸らせた。

「こりゃええ肉やで、食う前からうまそうやんけ」

「野村君、肉選びのセンスあるわぁ」

　だがしかし、いざ口に入れてみると、とてつもない不味さだった。肉が古いとか固いとかそういう問題ではない。一噛みした瞬間、グレープフルーツのような柑橘系の果物の分厚い皮をそのまま焼いて食ったような感触に、腐った山椒のようなキツい酸味と不快な辛さが咥内に広がった。

初めて、人の見ている前で食べ物を吐いた。他の皆もそれを口から吐き出して、口々に文句を言った。

「野村！　なんやねんこの肉！　ありえへんぞ！」

「何の肉や！？　イヌかネコか？　ネズミか？」

　だが、皆の苦情を余所に、野村君はその肉を平然と租借していた。

「え、そんなに美味しくないですかね……」

「野村君、それ平気なん！？」

「いや、平気も何も、美味しいやないですか」

　あんな凄まじいものを、彼は何食わぬ顔で食べている。微妙な空気が周囲を包んだ。

「ねえ野村君、それどこで買ってきたん？」

　女子社員の一人が尋ねると、彼は依然口の中で肉を噛みしだきながら答えた。

「この辺りからちょっと離れたところの道にね、あったんですよ。ほら、田舎とかによくある、お客さんがお金を置いていく、機械じゃない自動販売機みたいな棚。あっこに置いてあったんですよ。２００円でした」

「そ、そんなもん買ってくるなよ！　誰がいつ置いたかも分からんのに！」

「でも、美味しいですよ」

　周りの人間の不機嫌も何処吹く風、彼はくちゃくちゃと何食わぬ顔で肉を食べ続けた。

　結局、バーベキューはロクでもない結果に終わったのだ。さっさと道具を片づけ帰る時になっても、野村君はまだ残って冷めたあの肉を食べ続けていた。誰一人しゃべらない、異様な雰囲気の車内においても、彼だけは一心不乱に口を動かしていた。

　数日後、夏期休暇が終わったが、野村君は会社に来なかった。

「胃でも悪くしたか知らんけど、連絡ぐらい寄越すのが社会人としてのマナーやろうが」

　先輩が渋面をして、彼の家に電話を掛けた。最初の内は「叱って反省させてやる」とでも言いたげな調子であったが、その表情は徐々に気まずさを伴ったものに変化していった。

「と、とりあえず、身体には気をつけろよ……」

受話器が置かれた後、気になって尋ねてみると、あたかも如何わしいものを聞かされた後のように青ざめながらこう言った。

「あいつ、電話してる最中、ずっと口くちゃくちゃ鳴らしてるんや。ひょっとしたらあの時の肉、まだ食ってるんちゃうか……」

　その後、野村君は二度と会社に来なかった。川での一件もあり、同僚達は「さも当然」という感じで、さして驚いてもいなかった。ただ、触れてはならない出来事、という空気があった。

　私はそうした暗黙の了解に対して、些かの抵抗を覚えた。確かに、あのことがあってからの野村君は少しおかしい。だからって、まるで最初からいなかったかの ように扱うのは少々酷いと思う。あの時、私たちが必要以上に彼を遠ざけたのも、こうなった原因の一つじゃないだろうか。

　彼が会社に残していたわずかな私物を届けるという名目で、私は彼の家を訪ねることにした。せめて、彼の今の気持ちを聞いてあげることができれば、少しは良い方へ向かうかもしれないと思ってのことだ。

　仕事帰りの電車内、入社したての彼に仕事を教えた日のことを思い出しながら、私は彼の住むアパートへ向かった。

　インターフォンが壊れていたので何度か扉をノックすると、開いた扉からぬっと顔を出してきた。ぼさぼさに荒れた髪、目下の大きな隈、よれよれのシャツ、私が知る初々しい野村君の面影は、もはや失われていた。

「ああ、久しぶりですねえ、元気ですか？」

　くちゃくちゃ。喋っている途中、口の中で咀嚼しているものがぽろっと飛び出して地面に落ちる。何度も噛み潰された肉の欠片だった。

「まあ、中入って下さい。話したいこといっぱいあるんで」

　彼は部屋の奥に歩いていく。私は扉を開けたまま、中へと入った。カビ臭さと血生臭さが混じった異様な悪臭が鼻を突いたが、何とかこらえた。

　届けた私物に興味を示すことなく、彼はちゃぶ台の上を指さした。そこには、あの時の生肉が皿に盛られていた。

「最初は焼かんとアカンかったけど、今は大丈夫です。生でたくさん食えますよ」

彼の息は、凄まじい血の臭いがした。周囲を飛び交う蝿の羽音が、いやがおうにも不快感を増大させる。

「あの後、この肉がもっともっと食べたくなって。他の肉も食べたんやけど、全然ちゃうんです」

　そう言って、皿の上の肉を一切れ摘み、口に入れた。咀嚼音が大きくなる。

「俺、もう一度あの付近に言って色々調べたんです。それであの肉を売ってる人を見つけて、何とかして秘密を教えてくれませんかと必死に頼み込んだんです。そしたら、この本をもらいましてね」

　ちゃぶ台の側には、いかにも古そうな書籍が山積みにされていた。一番上の「奇肉食考」と題字が書かれた本の表紙には、おそらく食べている途中にこぼしたのであろう、肉の欠片が所々にこびりついている。

「この本を隅から隅まで読みあさって、ようやく分かったんですよ、この肉の正体が！」

「肉の正体……？」

野村君は不気味に笑い、引き出しの扉を勢いよく開けた。中にいた「生き物」を見て、喉の奥から吐き気がこみ上げてきた。

　それは全体的にはナメクジやウミウシのような軟体動物に似ていたが、紅色のぬめり気ある身体はまさに生レバーそのものの塊であり、その肉体を小刻みに波打たせてゆっくりと這っていた。前方には豚のそれを丸ごと抉り取って取り付けたような眼球が二つ備わっていて、それが無軌道にくるくると周囲を見渡している。

「これはね、視肉っていう生き物でね、伝説上の生き物なんです。肉の塊にめん玉がついてるからそういう名前なんですって」

　疲労が蓄積している眼を醜く歪めながら、彼は生き物の軟体を掴み、そしてそのまま力をこめた。ギイッ！と生き物の悲鳴が聞こえ、肉の一部がちぎり取られた。そしてそれを野村君は口に入れ、満足げな顔つきで噛みはじめた。

「こんなことしたら、死んじゃうって思うでしょ？　よう見て下さい」

　生き物の方に眼を向けると、驚いたことに先ほどちぎり取られた箇所から新たな肉が生え、瞬く間に元の形へと戻ってしまった。

「すごいでしょ？　この生物は不死身で、肉体が無限に再生するんです。だからこいつがいる限り、一生美味しい肉が食えるんです」

　だから……と呟きつつも依然口を動かしながら、野村君が私に迫る。肉が口からはみ出るのも、気にする気配は全くない。

「ねえ、先輩もこの肉食べましょ？　最初は嫌かもしれへんけど、段々慣れてきますわ。俺、今まで言わんかったんですけど、先輩のこと好きなんです。せやから……」

　彼は私の腕を掴み、自分の口から取り出した肉を近づけた。

　「やめて！」

　ポケットから取り出したスプレーを、彼の顔めがけて噴射した。叫び声を上げながら倒れ、床をのたうち回る彼を尻目に、私は急いでその場から逃げ出した。

　それから、彼の行方は知らない。あの時私が見たものは、一体なんだったのか。不死身の肉体を持つ未知の生物か、それとも彼の狂気が造りだした単なる肉人形の出来損ないなのか……。

　いずれにしろ確かなことは、彼が正体不明の肉塊に魅了され、その人生を狂わされたということだ。この世の中には、何が潜んでいるか、全く分からない。

　実は、あの生き物を目撃してから、私の頭の中に妙な感情が芽生えた。突然、なんの前触れもなく、生の肉を貪りたくなる。我慢できずに一度だけ、冷凍庫に入れておいたバラ肉をかじったことがあったが、到底食べられるものではなく、吐き出してしまった。だが、この欲望は消滅せず、あたかも性欲のように浮いたり沈んだりを繰り返している。

　もしこのような状態で、ふとした偶然から、彼のようにあの肉を見つけてしまったら……。想像しただけでも、ぞっとする。

（完）

狂肉

http://p.booklog.jp/book/94165

著者 : エンジン
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lazeengine/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/94165

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/94165

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ